

氏名 大重 育美
学位の種類 博士（応用情報科学）
学位記番号 博情第 33 号
学位授与年月日 平成 28 年 3 月 22 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）
論文題目

安心・安全な子育て環境づくりのために地域で取り組むサポートシステム
論文審査委員 (主査) 教授 石垣 恭子
(副査) 教授 西村 治彦
(副査) 教授 東 ますみ

学位論文の要旨

本論は、安心・安全な子育て環境づくりのために父親力と祖父母力を活かして地域でできるサポートシステムの構築が目的である。

子どもの事故は、全世界で共通する課題である。本邦においても幼児の死亡原因のトップは不慮の事故である。昭和 35 年以来、この実態に変化はなく、緊急に予防対策が必要で母子保健の主要課題として挙げられている。そのため、地域に応じた事故予防活動が重要となっている。「子どもの事故は病気と同じ傷害と考える」とすると安全な子育ての環境づくりは、安心できる子育て環境づくりにつながるといえる。

これまで子どもの事故の実態調査から、子どもの事故の要因として、母乳哺育でない子ども、第 1 子である者などがあり、これらを含め事故は子どもの発達と関連していることが明らかとなっている。しかし、いずれも特定の集団であり、子どもの事故の要因を同一県内の地域差として比較検討されたものが少なく、そのまま地域の子ども事故防止教育に応用するには難しい。そこで本論では、A 県の離島を対象とし、同一県内の市内と離島の比較を行いながら調査を行った。子どもの事故防止に関する調査対象としては、これまで母親を取り上げた報告はあるが、父親を対象とした研究はほとんど報告されていない。核家族の進行や女性の社会進出による背景から父親の協力は欠かせない。育児に自信がない父親は、ゆったりとした気分で過ごせず育児状況も良くない傾向が指摘され、父親の自信がその後の育児状況に影響すると示唆している。

このように父親力の活かした方を探るため、「子どもの安全な父親力は子ども

の安全環境づくりにどのような影響をあたえるのか」という研究疑問を設定した。さらに、子育て支援の中核といえる子どもの保護者を取り巻く支援者に注目し、中でも最も影響がある祖父母力の可能性を検討した。「祖父母力は子どもの安心・安全な環境づくりにどのような影響をあたえるか」という研究疑問によって、安全だけでなく育児不安に寄り添えるサポートシステムについて取り組んだ。さらに2つの研究疑問から、研究課題を導いた。

本論では「安心・安全な子育て環境づくりを地域でサポートするために必要な仕組みづくりに必要なコンテンツを明らかにする」を主題となる研究課題とした。

次に主題となる研究課題を2つの研究課題から組み立てた。1つ目は「父親力は子どもの安全な環境づくりにどのような影響を及ぼすのか明らかにする」であり、2つ目は「祖父母力は子どもの安心・安全な環境づくりにどのような影響を及ぼすのか明らかにする」から構成した。

父親力としては、子どもの泣き声に対する反応で父親が母親に比べて早いタイミングで対応し、「あやす」などの声かけする育児行動を継続していたことで潜在的能力の高さが明らかとなった。このような育児行動を実践している父親は、父親アイデンティティが高く、子どもの変化にすぐに対応できる可能性が示唆された。父親力を有効活用するために、従来の母親を中心とした支援アプローチだけでなく、家屋別の特性を踏まえて父親の現状に寄り添った支援体制を整備していく必要がある。また父親は「母親をサポートする」という意味で大切であると同時に、父親自身も親として周囲から支えられていることが重要である。特に離島では祖父母などの同居家族の存在が父親の支援に影響していた。従来の「母親の支援の付加として父親への支援」を考えるのではなく、「父親自身のニーズを把握し、父親のニーズに即した講座を企画する」ことで、父親の子育て支援の参加への意欲を促すことが可能となる。このように育児支援を通じた啓発教育を考えるうえで、離島の父親が育児時間を多く確保できる環境は、子どもとの関わりの長さで父親としての役割意識を強めるという作用が働きやすい地域といえ、父親が主体的に関わる動機づけにつながりやすいと考える。

祖父母力としては、同じ地域に長く住み続けていることによって地域への愛着心が培われており、保護者が安心してサポートを受けることができ、祖父母の近所づきあいから相談しやすい環境を整え、さらに保護者自身が精神的に自

立できることが、育児不安を低減に結びつくことが示唆された。祖父母の地域愛着は、同一地域に長く住み続けているだけでなく、これまでの近所づきあいから、孫育児や家族以外にご近所さんを育児の相談相手とするなど、地域住民との交流が促進されていると考えられた。祖父母のもつ近所づきあいを保護者が利用しつつ、育児の相談をしやすい環境づくりを地域で育成していくサポートシステム構築が期待できる。

したがって、安心・安全な子育て環境づくりには、父親自身が子どもとの関わりの中で父親の役割意識を高めることができるような働きかけを行い、さらに啓発教育の対象者に祖父母を加えることで日常的な事故防止の行動意欲が高まる可能性が窺えた。

論文審査の結果の要旨

子どもの事故は、全世界で共通する課題である。本邦においても幼児の死亡原因のトップは不慮の事故である。昭和35年以来、この実態に変化はなく、緊急に予防対策が必要で、母子保健の主要課題として挙げられている。そのため、地域に応じた事故予防活動が重要となっている。「子どもの事故は病気と同じ傷害と考える」とすると、安全な子育ての環境づくりは、安心できる子育て環境づくりにつながるといえる。

本研究では、安心・安全な子育て環境づくりのために、地域でできるサポートシステムの構築が目的であり、父親力と祖父母力の2つに研究課題をおいた。

1つ目の「父親力は子どもの安全な環境づくりにどのような影響を及ぼすのか明らかにする」では、以下の事が示唆された。すなわち、父親力としては、子どもの泣き声に対する反応で父親が母親に比べて早いタイミングで対応し、「あやす」などの声かけする育児行動を継続していたことで潜在的能力の高さが明らかとなった。このような育児行動を実践している父親は、父親アイデンティティが高く、子どもの変化にすぐに対応できる可能性が考えられた。父親力を有効活用するために、従来の母親を中心とした支援アプローチだけでなく、家屋別の特性を踏まえて父親の現状に寄り添った支援体制を整備していく必要性が示唆された。また父親は「母親をサポートする」という意味で大切であると同時に、父親自身も親として周囲から支えられていることが重要であることが明らかにされた。

2つ目の「祖父母力は子どもの安心・安全な環境づくりにどのような影響を及

ぼすのか明らかにする」では、同じ地域に長く住み続けていることによって地域への愛着心が培われており、保護者が安心してサポートを受けることができ、祖父母の近所づきあいから相談しやすい環境を整え、さらに保護者自身が精神的に自立できることが、育児不安を低減に結びつくことが示唆された。また、祖父母の地域愛着は、同一地域に長く住み続けているだけでなく、これまでの近所づきあいから、孫育児や家族以外にご近所さんを育児の相談相手とするなど、地域住民との交流が促進されていると考えられた。祖父母のもつ近所づきあいを保護者が利用しつつ、育児の相談をしやすい環境づくりを地域で育成していくサポートシステムの構築が期待されることが明示された。したがって、安心・安全な子育て環境づくりには、父親自身が子どもとの関わりの中で、父親の役割意識を高めることができるような働きかけを行い、さらに啓発教育の対象者に祖父母を加えることで日常的な事故防止の行動意欲が高まる可能性が窺えた。

以上を総合した結果、本審査委員会では、本論文が「博士（応用情報科学）」の学位授与に値する論文であると全員一致により判定した。